

[011]九州大学総合研究博物館ニュース

<https://doi.org/10.15017/25310>

出版情報：九州大学総合研究博物館ニュース. 11, pp.1-8, 2008-11. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：



九州大学総合研究 博物館ニュース

November 2008 No.11

旧工学部本館3階に常設展示室を開設

多田内修



九州大学には、2000年のアンケート調査によれば、学内各部局に740万点を越える学術標本・資料が分散して保管されています。これらの標本・資料は、国内の大学では随一の規模を誇り、長年にわたり九州大学の教育と研究を支えてきましたが、今後更に新たな共同研究や学際的な研究の出発点となる可能性を秘めています。

2000年4月に創設された九州大学総合研究博物館は、新キャンパス移転後に博物館の建物を造る計画ですが、当面は箱崎キャンパスで活動を行っていきます。今回、旧工学部本館3階の第9番講義室を改修し、常設展示室を開設し公開いたしました。開学記念日に合わせて、平成20年5月8日には梶山千里九州大学総長および全理事の出席のもと、常設展示室の開設セレモニーを行いました。また、同時期には、日頃公開していない、旧工学部本館4階第二会議室では青山熊治画伯の壁画、50周年記念講堂3階では平山平次郎先生考古学資料、博物館第一分館では古人骨標本・脊椎動物骨格標本、鉱物標本等の一般公開も行いました。

今回開設した常設展示室（開設時間：平日の10時～16時30分）では、学内各部局および総合研究博物館に収蔵されている標本・資料の中から考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動植物標本、昆虫標本、技術史資料から特に貴重で興味深い、教育効果の高い標本・資料類を選んで展示を行っています。また、各部局に収蔵されている標本・資料類の概説ポスターの展示も行い、これらが学内収蔵コレクションのナビゲーションとなり、今後の新たな研究へのアイデアを提供する材料となれば幸いに思います。平成20年度には、常設展示室を利用して芸術工学部の演習授業が始まりました。今後関連学部との授業等での活用をさらに増やしていきたいと考えています。

大学で学ぶ人、働く人、大学博物館を訪れた人たちが、学術標本・資料という大学の知的財産に触れて感動し、知的好奇心をかき立てられることを心から願います。

（総合研究博物館 館長 専門：昆虫学）

常設展示室へようこそ:その1 「九大博物館標本かるた」うらばなし

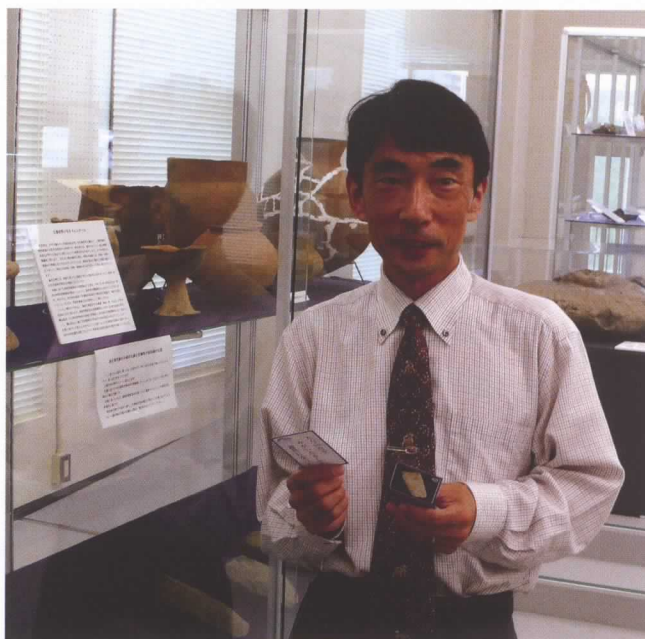
三島美佐子

この春から、新しい常設展示室がオープンしています。この常設展示室では、学内にある標本資料からまんべんなく選んだものを、少しずつ展示しています。部屋自体の改装は業者さんをお願いしましたが、物の配置やパネルなどは、館の教職員による手作りです。「常設展示室へようこそ」では、この常設展示室にまつわる話題を、シリーズでおおくりします。

さて、新展示室の展示物につけている解説も、博物館教員が、担当コーナーごとに、それぞれ別々に作ったものです。そうすると、難しいものからやさしいものまで、いろいろになってきます。もちろん、書いている教員たちは、「できるだけやさしく、わかりやすく」を心がけて解説を作ります。それでも難しくなってしまうのが、大学の先生の性(さが)とでもいいでしょうか。今回の展示は、高校生以上で、専門外の人を対象に作られていますが、私がみても「うーむ…」とうなってしまうくらい、長くて難しいと感じる解説もあります。

そんな展示室に、7月、大勢の子供たちがやってくるようになりました。「科学の公園」という団体が箱崎キャンパスで行う、子供むけの科学イベントのさい、博物館の常設展示室も土日臨時オープンすることになったからです。せっかく来てもらうのですから、子供たちにも楽しんでもらいたいし、本物の学術資料をみちかに感じてほしいと思うのが親(?)心。そこで、子供向けの解説をどうするか、ということになりました。

解説を子供向けに作り直すにも十分な時間がなく、またそ



担当した考古資料コーナーとその解説を横に、「え?そんなに難しい?すごく簡単にしたんだけど。」と微笑む岩永先生(考古学のご専門)。

れができたとしても、展示ケースには、うまく置けるスペースがありません。この大問題(?)を解決すべく、「P&P研究チーム」でアイデアを練ることになりました。このチームは、去年から九大内の研究経費(P&P)の補助をうけてはじまった「九大博物館展示室を活用した実践的研究」によるもので、博物館



完成した「九大博物館標本かるた」。上にあるのは、常設展示室の今の展示の配置図で、今回のシリーズのカバーです。どこにどの札があるかがわかるようになっています。

からは、中西先生、丸山先生、そして私が参加しています。今回は、ユーザーサイエンス機構からこの研究に参加している学術研究員の清水さんと、デザインを担当してもらった黒澤さんを含めた5人で、「子供向け解説」について考えました。

けんけんがくがくの話し合いの末、清水さんから発案されたのが、「カルタ」。ただの展示解説にするより、子供たちが家に持ち帰ることができ、そのあとも、家族との話題や自習のきっかけになるようなものにしよう、ということでもとまりました。まずは中西・丸山・私の各教員に、それぞれ自分の担当以外の展示コーナーをふりわけ、それを担当した先生方に、展示についてインタビューします。その内容をもとに、カルタの題材にする展示物と、解説内容をきめました。普通のカルタの読み札に書かれているような、俳句風の五・七・五にも、頭をひねります。丸山先生が写真をとってまわり、黒澤さんがデザインして、城島印刷さんで印刷してもらい、完成。目的のイベント日に、なんとか間に合わせることができました。

私たちは今回このカードを、「カルタのような展示の補助ツール」としてつくったので、読み札にあたる部分と写真付きの解説部分を、それぞれ1枚のカードの表と裏に印刷していました。ところが、子供たちは、やっぱりカルタとして使いたいのですね。だいたいの子供が、同じカードを、丁寧に、2枚ずつもって帰ります。これならちゃんと2枚にわけてあげたほうが

よかったかなあ、と反省です。

それから、私が担当した土器のカードで、間違いが発見されました。最終稿を各コーナー担当の先生方に見ていただきそびれてしまったのが失敗でした。現在は回収し、次回以降で改訂版を作りますが、もしお手元に土器のカードがありましたら、返却いただければと思います。

まだまだ宣伝がゆきとどかず、来場者は少ない常設展示室。みなさんもぜひ一度足をお運びいただき、「九大博物館かるた」をもらって、ご自宅でも楽しんでみてください。印象にのこった展示物を、五・七・五で表現してみるのも一興です。いい句ができれば、是非博物館まで送ってくださいね。九大標本かるたは、五十音目指して増やしていく予定です。

(総合研究博物館 専門：植物系統学)

九州大学総合研究博物館 平成20年度 公開展示 奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財

会 期：2009年1月1日(木)－2月8日(日)

会 場：九州国立博物館 4階文化交流展示室 〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2

開 館：9時30分-17時(入館は16時30分まで)

休館日：月曜日(月曜日が祝日・振替休日の場合は翌日) 観覧料 一般420円、高校生・大学生130円

九州大学は、筑紫地区(春日市・大野城市に所在)における諸施設の建設に先立ち、昭和53年度から平成10年度まで、埋蔵文化財の発掘調査が行われ多大の成果をあげました。しかし、諸般の事情から、その調査成果や出土品がまとまって学外に紹介されることはありませんでした。

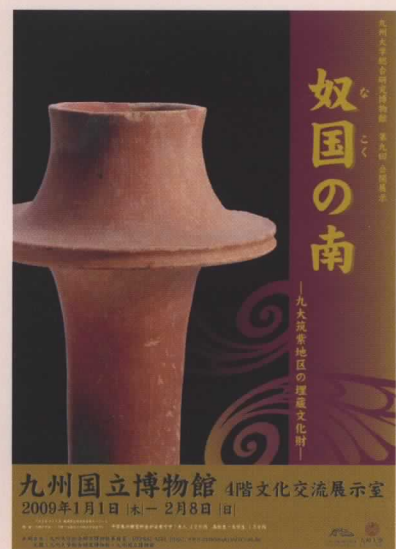
今回の展示では主要出土品を網羅的に展示するとともに、春日市・大野城市・太宰府市・筑紫野市など周囲の地域の近年の発掘調査成果を参照・比較しながら、当該地域の有した歴史的な位置付けを明らかにします。

弥生時代については、祭祀用土器・土製品、石剣・石戈、青銅器鋳型などを、奴国の中心部である須玖丘陵などの出土品と対比し、須玖丘陵に隣接する当該地遺跡群の位置付けを示します。古墳時代・古代については、須恵器製作用具・墨書土器・硯・瓦・木簡などから、窯業の一大中心地である牛頭窯跡群の直近であり、太宰府から博多湾に向かう官道沿いでもあった当該地域の歴史的な位置付けを考えます。

主催：九州大学総合研究博物館・九州国立博物館

お問合せ：九州大学総合研究博物館事務局

092-642-4252 <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>



生物関係(現生の植物、昆虫、魚類、哺乳類)の常設展示は、九州を中心とした地方で絶滅のおそれがある生き物に焦点を絞っています。そのなかの目玉として、水槽に展示されている生きた生物があります。ひとつは「九州北部の希少な淡水魚類」、もうひとつは「ゲンゴロウのなかま」です。前者の紹介は次回にゆずり、今回はゲンゴロウの水槽について紹介します。

「ゲンゴロウ」は、大きくて黄色いふちどりのある、種としてのゲンゴロウ *Cybister japonicus* をさすと同時に、ゲンゴロウ科 Dytiscidae に属する甲虫(コウチュウ目)の総称でもあります。甲虫ということからわかるように、水中生活に適応したカブトムシやオサムシのなかまと考えて間違いありません。ゲンゴロウ科は日本には130種ほどが生息しますが、大部分は10ミリ程度かそれ以下の小さな種で、種としてのゲンゴロウのような大型の種はごくわずかです。全種が肉食性で他の昆虫や小さな動物を食べて生活しています。

九州に生息する大型種(20ミリを超えるもの)はすべてゲンゴロウ属 *Cybister* の種で、さきほど述べた種としてのゲンゴロウのほかに、クロゲンゴロウ *C. brevis*、マルコガタノゲンゴロウ *C. lewisianus*、コガタノゲンゴロウ *C. tripunctatus* が知られています。本展示では、このなかのゲンゴロウ、クロゲンゴロウおよびコガタノゲンゴロウ(図)を生きた状態でお見せしています。

どの種もむかしはごく身近に普通に見られたといわれています。実際、年配の方に伺うと、戦後しばらくは田んぼや池でよく見かけたと聞きます。ところが、いまではどの種も全国的に激減しており、たとえば福岡県では、コガタノゲンゴロウ以外の種は、ほとんど絶滅寸前の状態にあるといわれています。今回の展示でも残念ながら福岡で採集された個体はお見せでき

ず、ゲンゴロウは島根県と福島県のもの、クロゲンゴロウは熊本県のもの、コガタノゲンゴロウは鹿児島県のを水槽に入れました。

どうしてこれらのゲンゴロウは減ってしまったのでしょうか。

もともと大型のゲンゴロウの多くは、人間の住む前には、氾濫する河川の近くにある池や、湿地に住んでいたと考えられています。そのような場所は古い時代に人間の生活によって失われましたが、一方で、人が作った水田やため池がゲンゴロウにとっての理想的な生息場所に置き換わっていました。しかし現代になり、その残された生息場所が、圃場整備による水田や水路、ため池の護岸により、急激に消失・悪化してしまったのです。

また、ゲンゴロウは光に集まる習性があります。意図せず街灯に飛来したものが、哺乳類に食べられたり、車にひかれて死んでしまったりし、それが結果的に減少につながったことも考えられています。日本が貧しかったころには街中を除いて夜は真っ暗闇だったそうですが、いまでは田んぼの真ん中にも街灯が立っていますし、いたるところに強力な光を発する建物があります。間違っただけに光に集まってしまう昆虫にとってそれらはたいへんな脅威です。

ではどうすればゲンゴロウを守ることができるのでしょうか。

ひとつには現在細々と生き残っている場所を保存することがありますが、ある生物を守るためには生息地周辺の広範な環境に気を配る必要があります。いまある場所だけを守るというのは、現実的には心もとないものです。

もっとも理想的なのは、ゲンゴロウの住める環境を作り、ゲンゴロウを呼び戻すことです。具体的には、放棄された谷の休耕田を掘り下げて湿地を作るか、水田の水路を素掘りに戻し、護岸を取りやめるなど、むかしの水田環境を作ることなど



1. ゲンゴロウ(40ミリ)、2. クロゲンゴロウ(22ミリ)、コガタノゲンゴロウ(25ミリ)。

が考えられます。

大型のゲンゴロウの住むような水田は、例外なくほかの生物も豊富です。ゲンゴロウのように環境に対して気難しい生物の保全に目を向けることによって、日本を代表する美しい風景である水田が、豊かな生物に彩られたより美しいものになるに違いありません。上にあげたような保全には、現実的には難しい問題がたくさんありますが、豊かな国に住むわたしたち—自然の恩恵にあずかっているわたしたち—だからこそ取り組める課題でもあります。

ゲンゴロウはよく見ると実に愛くるしい顔をしています。まずは展示室でその姿をご覧ください。彼らの眼が日本の自然環境について何かを訴えかけてくるかもしれません。

今回の展示にあたり、福澤卓也さん(東京農業大学)、藤原淳一さん(島根大学)、塚田拓さん(鹿児島県)、中島淳さん(九州大学)、渡辺恭平さん(東京農業大学)には貴重なゲンゴロウを生きた状態で送っていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

(総合研究博物館 専門:昆虫学・体系学)

オオクビキレガイ関東に侵入

松隈明彦

博物館ニュースNo. 5 (2005)、No. 9 (2007)で報じたオオクビキレガイのその後の状況について報告します。1988年に、我国で初めて北九州市戸畑区に生息していることが確認された地中海沿岸原産のオオクビキレガイは、2008年現在、西日本では、福岡県北部、佐賀県(小城市)、熊本県(荒尾市)、大分県(中津市、宇佐市)、山口県(下関市、宇部市、山口市、周南市)に分布しています。このほか、和歌山県(田辺市)にも分布していることが知られていましたが、2008年には千葉県君津市にも入っていることが確認されて、分布が関東にまで拡大していることが分かりました。

分布の様子を見ると、西日本では北九州市を中心に東西およそ100kmの範囲に広がっていることから、拡散の速度は、5km/年と見積もられます。前報でも触れましたが、オオクビキレガイが自力で拡散する速度は0.1km/年以下ですから、西日本での拡散速度は自力拡散の速度より50倍以上大きいことになります。このことから、西日本での拡散は、自力拡散ではなく、他力拡散であると考えられます。陸産貝類の他力拡散には、台風や竜巻などの気象現象によるもの、人によるもの、昆虫や渡り鳥など人以外の動物によるものなどが考えられます。福岡県での聞き取り調査から、土付の花苗・野菜苗のやり取り、引越に伴う植木やプランターの搬送、外構工事や圃場整備のための土の運搬などの際に、気づかずにオオクビキレガイを運んでいることが分かりました。オオクビキレガイは無意識に、人が運んでいる貝です。

オオクビキレガイは雑食性で、野菜や花などの植物のほか、生きているマイマイや鶏糞、犬の糞など動物性の有機物も食べます。侵入して間もないころは、密度が低かったために欧米と同じように「農作物のあまり深刻でない害虫」と考えられていました。最近では、西日本では生息密度が大変高くなり、野菜苗や花などに深刻な食害が発生しています。特に芽生え直後の野菜苗が、一晩ですっかり食べられる被害は深刻です。地中海沿岸では夏期に雨が少なく、夏眠を行います。高温多湿の西日本では一般に夏眠が起らず、食害が激しいようです。

外来種オオクビキレガイは、どここの国から、どのような方法で日本へ侵入したのかはまだ分かっていません。全国の植物検疫所で植物に伴って我が国へ入ってくる生物が調べられてその統計が公表されていますが、最近11年間の統計を見てもオオクビキレガイは1回も発見されていません。現在、大学博物館の古生物学研究室では、地中海沿岸各地のオオクビキレガイのミトコンドリアの塩基配列にどのような違いがあるかを調べ、国内各地のオオクビキレガイの塩基配列と比較する研究を行っています。もうすぐ、日本のオオクビキレガイの原産地国がどこであるか明らかになるでしょう。

外来種オオクビキレガイは、農作物への食害のほか、感染症をひき起こす有害な寄生虫の中間宿主とならないか、在来の生態系をかく乱しないかなど、慎重に検討する必要があります。オオクビキレガイを見かけられた方は、是非ご一報をお願いいたします。

連絡先:〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学総合研究博物館 松隈明彦
電話:092-642-4296(直通)
ファックス:092-642-4299
e-メール:matukuma@museum.kyushu-u.ac.jp

(総合研究博物館 専門:古生物学・軟体動物学)



オオクビキレガイ、福岡市東区和白。平成20年8月、丹久俊氏撮影。

常設展示室へようこそ:その3 鉱山模型のふるさとを訪ねて-フライベルク鉱山学校

中西 哲也

博物館展示室には、現在5個の採鉱冶金関連の精密模型が展示されています。これらの模型はドイツのフライベルク鉱山学校の模型工場で作成されたもので、Modellmeister “Rich. Braun”の銘が入っています。模型は採鉱・冶金関連合わせて24個が工学部列品室に保存されています。採鉱関連の模型については、大正3年購入の記録が古い備品台帳のコピーとして残っています。同様の模型は国内では、秋田大学鉱業博物館が所蔵しています。

2005年9月にフライベルク鉱山学校（現在のフライベルク工科大学）を訪れる機会に恵まれました。フライベルクの町は、ドイツ東部ザクセン州の州都ドレスデンから南西へ約50kmに位置します。フライベルク鉱山学校は1765年に設立され、スロバキアのシェムニッツ（現在のバンスカ・ステアヴィニツァ）の1762年に次いで2番目に古い鉱山学校とされています。日本の近代化において、鉱業に多大な影響を及ぼした、お雇い外国人クルト・ネットーが教鞭を取った大学でもあり、日本からは今井巖（東京帝国大学教授）、渡辺渡（東京帝国大学工科大学長）をはじめ、50人近い留学生がフライベルクで採鉱冶金学、鉱山地質学を学び、日本の採鉱冶金学の礎となっています。その中の一人である岡田陽一九州帝国大学教授は、1909年10月6日～1911年10月21日の期間、フライベルクに滞在しており、帰国後、鉱山関連模型の購入に関与したと考えられます。



フライベルク工科大学で展示中の鉱山関連模型。



鉱物博物館展示室の様子。



フライベルク鉱山の施設は、現在も大学の実習坑道として整備活用されている。（一般の見学も可。）

大学内には、現在も約4万点の模型が保存されているとの事でしたが、訪問時には丁度、展示施設の移転中であつたため約50点の模型を見学しました。模型は作成当時の最先端の技術を反映しており、学生の教育指導のために使われたとされます。

この他にも大学の附属施設として鉱物博物館があり、ザクセン地方の鉱山で採掘された鉱石をはじめ、世界中の鉱山の鉱物標本、鉱石標本が1500平米の展示室に並べられています。豊富な標本を活かして、地域別の展示の他、鉱床の成因別や鉱物種別など様々な視点での展示をおこなっており、学生の実習目的に合わせて各コーナーの展示がそのまま活用できます。

歴史ある鉱山学校として、坑道そのものや、鉱山関連の模型や標本を現在に伝え、活用している姿勢には、資源工学分野の研究者として、また大学博物館に携わる者として心から敬服します。

（総合研究博物館 専門：鉱床学）

当館が今年度に実施した、あるいはこれから実施する考古学関係の事業をご紹介します。

「中山平次郎先生関係資料」を展示しました。

2007年1月に、福岡市在住の岡部信彦氏・岡部啓子氏より、故岡部養逸氏旧蔵の中山平次郎先生関係考古学資料を当館にご寄贈いただきました。その内容については『九州大学総合研究博物館研究報告 第6号』で詳細にご紹介しました。中山先生が論文に掲載したことが明らかな遺物や、学史上重要な論文の自筆原稿が多く含まれ、学術的価値が非常に高いものです。考古遺物のすべてを、2008年5月9日から記念講堂3階の展示室にて陳列しています。

「玉泉館資料」が博物館に引っ越してきました。

「玉泉館」は、現在の六本松キャンパス^{たまいずみだいのりょう}にかつて存在した旧制福岡高等学校の教授であった玉泉大梁氏が、実物資料の学習を中心にすえた歴史・地理教育の必要を感じて、大正11(1922)年の同校開校と同時に蒐集を開始した資料をもとにして、文部省より予算を得て昭和5(1930)年に開設した「歴史地理資料室」として出発しました。その後、この施設は玉泉教授の業績を顕彰して玉泉館と呼ばれることとなり、第二次大戦後、新制大学制度の施行とともに、昭和24(1949)年に九州大学第一分校(その後の教養部)へと移管され、以来、昭和62(1987)年の講義棟(新館)増築に伴う解体まで、史・資料展示収蔵施設として機能してきました。

資料は旧石器時代から江戸時代に渡りますが、特に弥生時代・古墳時代・古代の資料に貴重なものが多く、九州における基準資料を含みます。

「玉泉館」の解体に伴って、資料は図書館六本松分館内の幾つかの部屋に分散して収蔵され、一部が展示されてきました。そのうち考古学資料については、比較社会文化研究院基層構造講座が管理していましたが、六本松地区の伊都キャンパスへの移転に先立ち、2006年度に博物館に移管されました。キャンパス移転がいよいよ今年度末に迫ったため、本年9月に六本松図書館から箱崎の博物館第一分館に引っ越しました。現在整理作業を続けており、来年5～6月にお披露目の一般公開を計画しています。どうかご期待ください。

公開展示「奴国の南」を開催します。

当館は今のところ大規模な常設展示施設を持たないことから、創設以来、学外の博物館施設を借用して公開展示を実施してきました。本年度は九州国立博物館のご理解・ご協力を得て、4階文化交流展示室の一郭を借用して開催することになりました。テーマは、九州大学における考古学の研究への興味を持っていただくべく、『奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財』としました。3ページにポスターと展示概要を載せました。

九大筑紫地区は律令制期の那珂郡と御笠郡にまたがっています。時代を遡れば、中国の史書『魏志倭人伝』が記す「奴国」の中心部である須玖丘陵の南方に当たります。「魏志倭人伝」に登場する諸「国」の実情とその歴史の解明は、主として考古学の方法と資料によってなされてきました。本展示会も奴国の研究におお

いに寄与できるでしょう。時代別に見どころをご紹介します。

◎弥生時代◎ 全国的にも希少な巴形銅器鋳型が出土しました。しかも北部九州製青銅器で初めて鋳型と一致する製品が判明しましたので、その両者を展示するとともに、製品の類品を網羅的に集めて流通の背景を考えます。大穴からまとまって多量に出土した祭祀用の丹塗り土器群のほか、瓢箪形土製品、銅鐸形土製品、石戈、石剣などの祭祀関係品、青銅製鋤先などから、当地の状況を探ります。

◎古墳時代◎ 通常、墓の副葬品である石製腕飾(石釧)が墓以外の場所で出土しました。全国でも稀な例です。石製腕飾類自体が九州では少ないので、網羅的に集めて出土の意義を考えます。須恵器製作用の木製工具3点がセットで出土しました。セットが揃うのは唯一例ですので、類品を集めて比較検討します。古墳時代前期の日常土器、後期の土師器・須恵器などから当地の様相を探ります。

◎古 代◎ 筑紫地区の東半から水城西門と鴻臚館を結ぶ官道が見つかりました。官道沿いには役所的施設があったらしく、木簡、硯、瓦が出土しました。官道の西方には小寺院があり、周囲の溝から多くの墨書土器、硯、瓦が出土しました。

これらの出土品とその研究成果によって、九州大学における考古学研究に関心を持っていただければ幸いです。

ポスターに写っている奇妙な品物は、現代美術のオブジェあるいは煙突のようにも見えますが、弥生時代中期後半(紀元前1世紀後半)に、主として墓地での祭祀に用いられた器台です。供え物を入れた小型の容器などを載せたのでしょうか。表面には赤い顔料・丹(酸化第二鉄)を塗って縦方向にへうで丁寧に磨いてあり、祭りの場での演出効果満点です。今回の図録・ポスターの作成にあたっては、考古遺物の写真撮影では第一人者である奈良文化財研究所の牛島茂氏に撮影を依頼しました。

(総合研究博物館 専門:考古学)



「中山平次郎先生関係資料」展示の様子。

活動状況(展示・講演会関係)

常設展示

平成20年5月8日～

九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館3階にて常設展示を開始しました。

特別展示

平成20年5月8日～

九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂2階にて「中山平次郎先生関係資料展」を開始しました。

平成20年5月8日～6月9日

九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館4階第2会議室ならびに青山熊治画伯作「壁画」を公開しました。

サテライト展示

●福岡空港 第1ターミナル2階待合室

平成20年5月21日～9月28日

化石のヒミツⅠ

平成20年9月29日～

化石のヒミツⅡ

●福岡市保健環境研究所「まもるーむ」

平成19年6月19日～

植物をもっと知ろうⅢ

●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

平成20年3月2日～5月3日

川の生命 うなぎ仔魚の長い旅

平成20年5月4日～7月8日

とる・つくる・そだてる 東シナ海の魚

平成20年7月9日～9月6日

とる・つくる・そだてる 資源の保護と管理

平成20年9月7日～

とる・つくる・そだてる 漁業

●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

平成20年3月2日～5月3日

川の生命 田で生活する生物

平成20年5月4日～7月8日

川の生命 エツ

平成20年7月9日～9月6日

川の生命 うなぎはるか外洋で産卵する

平成20年9月7日～

川の生命 うなぎ仔魚の長い旅

●前原市伊都文化会館

平成20年3月2日～5月3日

マリンバイオ 小さな生き物

平成20年5月4日～7月8日

マリンバイオ 遺伝子って何だろう

平成20年7月9日～9月6日

海の生命 九州近海に見られる温暖化

平成20年9月7日～

海の生命 海の生命を守ろう

P&P関連セミナー

「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」

～アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発～

第7回セミナー(平成20年6月27日)

第8回セミナー(平成20年7月8日)

第9回セミナー(平成20年8月11日、8月12日)

第10回セミナー(平成20年8月27日)

第11回セミナー(平成20年10月1日)

第1回ワークショップ(平成20年6月12日、6月16日)

第2回ワークショップ(平成20年6月28日)

第3回ワークショップ(平成20年8月11日、8月12日)

活動状況(その他)

新規寄贈標本資料

平成20年4月11日

言語文化研究院 福元圭太准教授より(旧)「日独 友好協会」福岡支部所蔵フィルム(35点)

平成20年9月25日

(故)村井省三氏収集昆虫標本(テントウムシ・カメムシ・ガ類 ドイツ型標本箱25箱・桐箱14箱)

運営委員会

平成20年3月 3日(書面回議)

平成20年4月24日

平成20年6月19日(書面回議)

平成20年7月22日(書面回議)

平成20年9月 1日(書面回議)

平成20年9月10日(書面回議)

平成20年9月24日(書面回議)

九州大学総合研究博物館ニュース

The Kyushu University Museum News

No.11, November 2008

発行:九州大学総合研究博物館 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL & FAX 092-642-4252 ホームページ <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷:城島印刷株式会社 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102 FAX092-524-4411